レポート「平成25年 日台共栄の夕べ」

聴き入った片倉氏の日台の絆を巡る講演

青年部長 杉本 拓朗

◆全国から百八十名が参加

昨年十二月月二十三日、本会は毎年暮の恒例となっている「日台共栄の夕べ」を、千代田区内のアルカディア市ヶ谷にて開催、全国から百八十名ほどが参加した。講演会の講師には、台湾でも日本でも大活躍し「台湾の達人」の異名をとる片倉佳史氏を台湾からお招きし、「今こそ考えたい、日本と台湾の絆」と題して講演いただいた。

第一部・講演会は、本会監査の江成雅子さんの司会進行により定刻の午後三時に始まった。

まず小田村四郎会長が開会の挨拶を述べ、続いて、李登輝元総統から「日台共栄の夕べ」に寄せられた祝辞を柚原正敬事務局長が披露した。李総統には昨年も祝辞をいただいており、本会へ寄せられるお心遣いに感謝しつつ、その全文を次頁にご紹介したい。

引き続き、来賓として、片倉氏を早稲田大学の学生時代からご存じだったというJET日本語学校理事長で評論家の金美齢さんにご挨拶いただき、また、一昨年十二月に親友でもある田母神俊雄・元航空幕僚長らと訪台して李登輝元総統にもお会いし、すっかり台湾に惚れ込まれた、元銚子市長で新しい歴史教科書をつくる会副会長の岡野俊昭氏にもご挨拶いただいた。

来賓として挨拶される金美齢さん。金さんには昨年同様「金美齢のお茶物語」を提供いただき、売上げも全額ご寄付いただいた（平成25年12月23日）

いよいよ片倉氏の登壇だ。片倉氏は十八年前の一九九五（平成七）年から台湾に住み、台湾の地理・歴史、原住

祝辞

「日台共栄の夕べ」にお集まりの小田村四郎会長はじめ会員の皆さま、台湾の李登輝です。今年も恒例の「日台共栄の夕べ」を開催されるそうで、心から祝意を表します。また、この一年間の皆さまの台湾に対するご支援、台日関係促進におけるご努力に敬意を表します。

さて、本年も残りわずかとなりました。今年もいろいろありましたが、何といっても嬉しかったのは四月に「台日漁業協定」が締結されたことです。台湾と日本の間に横たわる大きな問題はこの尖閣諸島の漁業権だけでしたし、台湾の漁民のために早期妥結を望んできた私にとって、実に喜ばしいことでした。まさに歴史的快挙です。

また、日本は台湾と断交後、法的根拠を欠いたまま交流を続けています。このような現状に対して日本李登輝友の会の皆さまが「日台関係基本法」の早期制定を発表されたことは深く胸に刻まれました。日本に残された課題はまさに日本版「台湾関係法」の制定で、私も訪ねてくる日本の国会議員の方々に必ずこの件を説明し、制定を急ぐべきとお話ししているところです。

安倍総理は台湾について、民主、自由、平和といった基本的価値観を共有する重要なパートナーと表明しております。恐らく日本の総理大臣でここまで踏み込んで表明したのは安倍総理が初めてではないかと思います。お陰でこれまで以上に台日関係は緊密になりつつあり、この安倍政権でぜひ「日台関係基本法」が成立することを希望しています。

台湾と日本は兄弟のように、心の通う、仲のよい国です。今後も台日共栄の理念の下、貴会とはさらに提携を強め、両国のため、そしてアジア全体のために努力、邁進していきたいと考えております。

本日のご盛会と、来年における皆様のますますのご健闘をお祈りいたします。

二〇一三年十二月二十三日

台湾元総統　李　登輝

民族の風俗・文化、グルメ、鉄道などのジャンルで執筆・撮影を続けて多くの台湾ガイドブックを手がける一方、李元総統著の『日台の「心と心の絆」』も編纂。李元総統もこの著書を殊のほか気に入られているようで、今でも訪問する方々に差し上げている。

◆台湾と日本にしかできない交流

片倉氏は冒頭、台湾からの来日者数が十二月にすでに二百万人を超えたことや、東日本大震災への義捐金が二百億円を超えるなど、台湾の人々がどうしてここまで日本に温かい眼差しを向けてくれるのかについて、五つの理由を挙げて説明された。

それは、日本のいいところも悪いところも知った上での親日感情、助け合いが当たり前の社会、自分が今できることをする主体性の強さ、止めようがないほど強くなっている日台の交流、わび・さびやもののあわれ、絆など抽象的概念を共有する日本民族の特性を理解できることだと説明。

説得力に富んだ講演をされる片倉佳史氏

片倉氏の話は、台湾人気質や日本統治時代のこと、はたまたNHK「JAPANデビュー」や出征した高砂族のこと、高雄や台南などの町の特徴等々、多岐にわたったが、そのいずれもが本からばかりでなく、取材など通じて感得した貴重な体験に裏づけられているため、説得力に富み聞きやすい。参加者もしきりにうなづきながら聞き入っているのが印象的だった。

片倉氏は講演の終わり近くに、かつて蔡焜燦（さいこんさん）氏から八田與一（はったよいち）の話を伺ったとき「僕たちが昔の日本人を見ていた眼差しを理解することはできないんだろうな」と言われたことを紹介し、そのときは意味することがよく分からなかったそうだが、後々見えてきたとして「台湾と日本は世代を問わず特別な関係です。恐らく蔡さんたちは、日本人の後姿に何かを感じたんでしょう。それを私たちが真似することはできません。ただ、私たちも蔡さんたちの後姿を見て感じています。それを台湾の

満堂となった講演会場

若者たちに見せることができれば、台湾と日本にしかできない交流、絆ができるのではないか」と話された。

そして「一度興味を持ったらどこまでも入り込んでゆけるのが台湾。奥深さこそ台湾の魅力。自分なりの台湾観を持っていただいたら、コミュニケーションが面白くなってきます」と、一時間半の講演を締めくくられた。

梅原克彦・常務理事が閉会の挨拶を述べ、第一部を終えた。

なお、片倉氏の講演を聞きたかったという会員の方々からの声も多く、講演録をDVDとして頒布の予定だ。

自著購買読者にサイン中の片倉佳史氏

◆和気あいあいの裡に閉会

第二部の大忘年会には片倉氏や金美齢さんも参加、理事の反町佳生氏が司会進行つとめ、黄文雄・副会長の開会挨拶から始まった。

続いて、来賓として、李登輝総統から台湾に招待されて以来、台湾が大好きになったという「歴史通」編集長の立林昭彦氏と、鳥居信平を日本で初めて紹介した『水の奇跡を呼んだ男』などでも著名なノンフィクション作家の平野久美子さんにご挨拶いただいた。実は小池百合子・衆議院議員にもご挨拶いただける予定だったが、残念ながら直前に公務の都合で欠席となった。

蔡焜燦氏と許文龍氏に感謝状を贈呈した台湾協会の根井洌・理事長による乾杯の発声後、清宴に移った。

懇親の場がピークを過ぎて少し落ち着いたころ、NHK「JAPANデビュー」裁判を闘って来られた弁護士で本会理事の尾崎幸廣氏、李元総統の単行本を間もなく出版するウェッジ取締役営業部長の吉村伸一氏、「日本から台湾の世界遺産登録を応援する会」代表理事の辛正仁氏に、それぞれ関連するお話をいただいた。

続いて行われたお楽しみ抽選会は、進行役が監事の薄井保則氏に替り、中華航空やエバー航空の台湾往復チケット、台湾高級ホテル宿泊券、李元総統ご揮毫文鎮、台湾鉄道弁当、月刊「正論」六カ月無料購読券、台湾茶器、白柚、老酒などが景品として提供され、抽選のたびに一喜一憂、二個入りの白柚が当たった方の中には一個をお知り合いの方に分けられる方もいて、本当に和気あいあいの裡に閉会となった。

川村純彦・常務理事が閉会の挨拶を述べ、最後の万歳三唱は、映画「台湾アイデンティティー」に出演した理事の呉正男氏が日台の共栄を祈って声を限りに行い、盛会裡に終了した。